

差出人: NewsMail - metaFrontier.jp, LLC <newsmail@metafrontier.jp>
送信日時: 2014年1月12日 日曜日 3:34
宛先: info@metafrontier.jp
件名: メタフロンティア ニュースメール Vol.22 (2014/1/12)

各位

いつもお世話になっております。
メタフロンティア合同会社の柴田賀昭です。

弊社が関わる業界団体の活動に関し、ファイルベース関連のトピックやセミナー情報、その他各種ご案内などを不定期にてお届けいたします。

本メールの転送はご自由です。まわりにご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どうぞ遠慮なくご共有ください。

また配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作をして下さい(宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入していただければ自動的に削除されますので、どうぞ遠慮なく。

◆目次

- 柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」
- AMWA(Advanced Media Workflow Association) 発
- EBU(European Broadcasting Union) 発
- FIMS(Framework for Interoperable Media Systems) 発
- SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers) 発
- その他
- メタフロンティアからのお知らせ

◆柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」

- 第10回 ”「放送と通信の融合」とは何ぞや?”

新年、明けましておめでとうございます。昨年3月から始めたこのコラムも、早や10回目となりました。その間、様々なコメントをお寄せいただき、あるいはそうでなくとも「読んでるよ!」と直接お声掛けいただき、大いに励みになっています。

尤も、本メルマガの主たる目的は特に欧米のファイルベース関連(+α)の情報提供でありますので、こちらも引き続きアンテナを張って情報収集に取り組んで参ります。つきましては、本年も引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

さて、2014年といえば、やはり最も注目すべきは4K/8K(現行HD×4あるいは×16の高画質を謳う映像技術)の動向でしょう。先日、米ラスベガスで開催された世界最大級の国際家電見本市2014 International CESでも「4K」が今年のキーワードとして引き続き脚光を浴びているとのこと[1]し、今年の実施が予定されている4K試験放送に向けた実証トライアルも順調に進んでいるようです[2]。

巷には「本当に今以上の高精細化が必要なのか?」といった声もあるようですが、放送大学の仁科エミ教授によれば、主観的な感動を超えた「脳の反応」といった側面からみれば、視覚情報密度が上がるほど基幹脳活性が高まるという実験結果も得られているとのこと[3]で、やはり更なるリアリティの追及に向けて、その本格的な実用化が非常に待ち遠しいところです。

一方、「放送サービスの高度化に関する検討会」が打ち出したもうひとつのテーマである「次世代スマートテレビ」[4]。これが意味するところは多々ありそうですが、総務省が描くイメージ[5]によれば、それは少なくとも技術的には、いわゆる「放送」

と「通信」(ネット)の融合を具現化したものと言えそうです。

この「放送と通信との融合」なる言葉、古くは情報スーパーハイウェイ構想が話題になった90年代初頭から語られ始め(蛇足ながらこの機会に、当時大きな衝撃を受けた旧AT&Tによる“AT&T's vision of the future”なるプロモーションビデオを探してみました[6]。あれから20年、まだ完全な実用化には至っていないものの、少なくとも試作品レベルでは、その多くが実現されているような気がします)、更にその10年後、堀江貴文氏率いるライブドアが(当時、フジテレビの親会社であった)ニッポン放送の買収を仕掛けた2005年には、そのことが日本でも大いに話題になりました。

それから更に10年、確かに多くのテレビがイーサネットの口を備え、ネット検索を可能にしたり[7]、ニュースや天気予報を見せたり、さらには見逃し番組をオンデマンドで提供したりしています。でも、最後のそれは兎も角、前者については何もわざわざテレビでやる必要があるのかと(そう言えばGoogle TVなる取り組みもありましたね[8])。

ということで、ここ最近話題になってきたのが、番組に関連した情報やアプリを同じテレビ画面、あるいはタブレット端末などのいわゆる「セカンドスクリーン」に提示するというアプローチであるとみています。そしてその急先鋒はやはり、NHKが昨年9月に開始したNHK Hybridcastでしょう[9]。今のところ、「ちょっとリッチなデータ放送」といったところのようですが、将来的にはSNS(Social Network Service)との連携や、関連情報を視聴者の嗜好に応じて選択入手して動的に提供するサービス、あるいはネットで同時送信される関連映像を放送番組に同期させて表示するマルチビューサービスなどの提供も検討されているようです[10]。

ただ、これらのトライアルのベースにあるのは、メイン素材はあくまで放送にて提供する(映像)番組素材であって、ネットで提供するのはそれを補足する(情報)素材という考え方かと。まあ、(テレビジョン)放送局による取り組みですからそれは至極当然のこととは思いますが、ピュアな技術者として「放送」と「通信」をかんがみした場合、その主従を逆転させたような発想があっても良いのでは、と思ったりする訳です。

すなわち、「放送」の特徴である一斉同報性、これは同じ情報を一度に広くあまねく提供できるということですが、換言すればそれは、個別の端末の事情に応じて情報を提供することは不可能ということでもあります。他方で「通信」(ネット)は、基本的には1対1対応となりますから、各々の受信端末に応じた情報提供が可能です(尤も最近はネットを用いた「放送」(映像のライブ配信)も一般的になりつつありますが、スクレーパリティといった観点からみた場合、やはり不得手と言わざるを得ないかと)。

このようなそれぞれの特徴に着目すれば、本当に一斉同報を必要とする情報のみを「放送」で提供し、後は「通信」(ネット)で持ってこさせるといったアプローチもありかと。例えばEPG(Electric Program Guide: 電子番組ガイド)など所望の番組を入手するための手がかりとなる情報のみを「放送」で提供し、実際の(映像)番組としては、それを手掛かりにしつつも、それぞれの受信端末の事情、例えば受信端末のデータ処理能力やネットの接続状況に応じたデータ量を持つ番組素材をネットで提供するというアプローチもあってよいのではないかとふと思った次第です。

こんなことを言うと放送関係者からはお叱りを受けそうですが、もちろん「放送」リソースが十分に確保できるのであればそれは素っ頓狂な話でしょう。しかしながら放送に割り当てられた周波数は有限ですし、さらには純粋に情報伝送速度の進化や産業規模(これは結局、どれだけのカネを研究開発に費やせるかに直結します)をみた場合、「放送」に比べて「通信」の方が桁違いに大きいことも純然たる事実なのです。

ならば、「放送と通信の融合」において、(特にふんだんな「放送」リソースが確保できない場合)「放送」はそれが最も得意とするところに注力させ、後は「通信」に任せるといった考え方も、まんざら馬鹿げた話でもなかろうと思う次第です。

いずれにせよ、この2014年は高画質化のみならず「放送と通信の融合」にとってもひとつの大きな山場になろうかと。ならば、まさに文字通りそれを実感させてくれるような新たなサービスの出現を大いに期待したいと思います。

- [1] <http://www.nikkei.com/article/DGXBZ065019420Y4A100C1000000/>
- [2] <http://japan.cnet.com/digital/av/35041972/>
- [3] 月刊ニューメディア 2014 年 1 月号、p. 14
- [4] http://av.watch.impress.co.jp/docs/news/20130531_601798.html
- [5] http://www.soumu.go.jp/main_content/000168945.pdf
- [6] <http://www.youtube.com/watch?v=yFWCoeZjx8A&list=PLDB8B8220DEE96FD9&index=165>
- [7] <http://www.rbbtoday.com/article/2009/04/07/59132.html>
- [8] http://ja.wikipedia.org/wiki/Google_TV
- [9] <http://www.nhk.or.jp/hybridcast/online/>
- [10] <http://www.nhk.or.jp/str1/publica/rd/rd133/PDF/P10-19.pdf>

◆AMWA(Advanced Media Workflow Association) 発

- AS-11-NA “MXF for Program Contribution – North America”プロジェクトの開始が正式承認されました。
<https://basecamp.com/1791706/projects/3084733-amwa/messages/19725718-new-project-approved>

◆EBU(European Broadcasting Union) 発

- 1/28(火)-30(木)の日程で Geneva で開催予定の“Production Technology Seminar (PTS2014)”が、引き続き参加者を募集中です。
https://tech.ebu.ch/events/pts2014?newsletter_january2014
(プログラム)
https://tech.ebu.ch/docs/events/production14/pts2014_programme_web.pdf
- EBU Radio Week (2/10(月)-14(金))のメインイベントとして 2/12(水)に Geneva で開催予定の Digital Radio Summit が、参加者を募集中です。
https://tech.ebu.ch/events/drs2014?newsletter_january2014
(プログラム)
https://tech.ebu.ch/docs/events/radiosummit14/drs2014_web.pdf
- 3/26(水)-27(木)の日程で Geneva で開催予定の BroadThinking 2014 のプログラムが公開され、参加者募集が開始されました。
https://tech.ebu.ch/events/broadthinking2014?newsletter_january2014
(プログラム)
https://tech.ebu.ch/docs/events/broadthinking14/bt14_programme_web.pdf
- EBU, BBC 及び Google の主導の下、A/V コンテンツ検索のための Schema.org の語彙の拡張検討が進行中です。
https://tech.ebu.ch/news/schemaorg-extensions-to-aid-media-content-03dec13?newsletter_january2014

◆FIMS(Framework for Interoperable Media Systems) 発

- “FIMS, SOA and Media Applications: How modern software systems can serve media businesses”なるタイトルの White Paper が発行されました。
http://www.amwa.tv/downloads/whitepapers/AMWA-WP-SOA_for_broadcasters-web.pdf

◆SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers) 発

- SMPTE, EBU, VSF (The Video Services Forum)の共同タスクフォースである JT-NM (Joint Task Force on Professional Networked Streamed Media)が、技術提案の募集結果をまとめた報告書を発行しました
<https://www.smpete.org/jt-nm>
- SMPTE と CIMM (The Coalition for Innovative Media Measurement)が共同で、Ad-ID や EIDR (Entertainment Identifier Registry)などのコンテンツ ID をコンテンツ自体に埋め込む技術についての提案募集(Request for Information (RFI))を開始しました。
http://www.prweb.com/releases/2013/SMPTE_CIMM/prweb11427998.htm

◆その他

- Mr. MXF こと Bruce Devlin 氏 (AmberFin CTO)による無料オンラインセミナー

“Bruce’s Shorts – Tip of the Week...”(日本語字幕付)が、好評配信中です。
<http://www.amberfin.com/shorts-jp/>

◆メタフロンティアからのお知らせ
(新着情報: <http://metafrontier.jp>)

- 柴田賀昭が SMPTE で議長を務める「UMID 応用プロジェクト」において提案された、SMPTE RP 205 (Application of Unique Material Identifiers in Production and Broadcast Environments)改定において、同文書の修正稿が完成し、二度目の FCD 投票 事前レビューが開始されました。
https://kws.smpete.org/kws/groups/30mr/documents/documents1666/document?document_id=26534

- 「この戦略製品・サービスを特許で守るにはどうすればいいのだろう？」とお悩みの方はいらっしゃいませんか？また、「出願はしたもののその後の対応が不適切で拒絶査定を受けてしまった。」とか、「何とか特許は取ったものの競合に簡単に回避され、結局はカネの無駄に終わってしまった。」なんて悩みもしばしば聞かれるところです。

モノづくりによる差異化が厳しくなる中、新たなビジネスの展開において特許制度の戦略的な活用がますます重要になってきました。ここで戦略的な活用とは、単に思い付きのアイデアを特許出願することではなく、そのビジネスの展開においてその特許の目的や役割ををきちんと見定め、最小の費用で最大の効果を狙うということです。

すなわち、まずはその製品・サービスのどの部分が特許で保護できそうかといった検討から始め、次に、特許出願とは技術情報を公にすることであり、またその権利化までには相当の時間と費用が掛かることを踏まえ、それは本当に特許を取得すべき技術内容かどうかを様々な側面からしっかりと検討する必要があります。

そして一旦出願すると決めたならば、特許庁の厳格な審査に耐えて権利化を獲得すべく、十分な先行技術調査のもと先行技術に対する優位性を明確に訴求する必要があります。

特許出願と言えは一般的には特許事務所の仕事と考えていませんか？もちろん最終的に特許を出願する時には弁理士への依頼が必要です。しかし彼らの商売は御社に出願してもらって初めてナンボの世界、つまりそこには、必ずしも御社のビジネス、製品戦略に最適の助言ができるとは限らない構造的な問題があります。

さらに技術分野が細分化、深化する中、ひとりの人間がカバーできる範囲には自ずから限界がありますので、必ずしも御社の発明内容を本当に深く理解できる弁理士に担当してもらえとは限りませんし、ましてや御社のビジネス戦略上の選択肢のひとつとしての知財活用のあり方などは、一般的に彼らの専門領域を超えた範疇の話となります。

最近、前職において 40 件以上の出願をおこない、その後知財部署に異動してその 3/4 以上の権利化を達成した経験[1]を見込んでいただいたクライアント様から、特許出願に関するご相談を承り対応して参りました。ここでは、単に特許出願のみならず、自らの経験に基づいた国際標準化活動なども勘案したビジネス戦略上の活用方法などについてもアドバイスをさせていただきました。

私どもは弁理士ではございませんが、前職にてビジネス戦略における特許制度の活用方法を様々な側面から深く調査研究した経験があります。さらに自ら発明者として多数の特許を出願し、また知財担当としてそれらの多くを権利化した実績があります。

ただ私どもの専門分野はあくまで映像技術あるいは IT/マルチメディアですからそれ以外の、例えば化学や医療関連といった分野では門外漢です。

つきましては、もし御社で特許に関するお悩みや相談事などがございましたら、是非ご支援をさせていただきたく、まずは弊社(info@metafrontier.jp)までお気軽にお声掛け下さい。

[1] これまでに柴田賀昭が出願、取得した特許の一覧です。

<http://metafrontier.jp/drupal/ja/about/members/patents>

- ファイルベースワークフローを導入したものの「こんな筈ではなかった。」とか「何とか使ってはいるものの完全なブラックボックス状態で、万一の時が不安。」などといったことでお困りのユーザ様はいらっしゃいませんか？

特にこれまで親しんできた技術トレンドとは“非連続”な IT ベース技術が業界に急速に広がるにつれ、ユーザ様とベンダ様との会話がうまくかみ合わず、関係を損ねてしまったといったお話もちらほらと伺っております。

ファイルベース技術は今も日々改良が進められているものの、残念ながら現時点においても、(ベンダ様を問わず)ユーザ様のあらゆる要求を完全に満足できるようなソリューションが提供可能な技術レベルには達していません。

従ってファイルベースワークフローの導入を本当に成功させるためには、ユーザ様、ベンダ様が互いの深い信頼関係の元、技術とコストの兼ね合いから、その時点での「ベストソリューション」を互いに切磋琢磨しながら探っていくといった姿勢こそが最も大切なことであります。

弊社ではファイルベースに関する豊富な技術知識を元に、ベンダニュートラルな立場から、ユーザ様とベンダ様が相互理解をより深めて「ベストソリューション」を見出すための“技術通訳”といったお手伝いをさせていただきたいと考えております。

つきましては、何かお困りのことがございましたら、まずは弊社 (info@metafrontier.jp) までお気軽にお声掛け下さい。

- MXF (Material Exchange Format) の出張セミナー、引き続き好評提供中です。

“MXF は初めて”という方々を対象に MXF が絡むビジネス判断をおこなう上で必要とされる MXF 技術の基本知識の習得を目的とした「基礎編」と、これから本格的に SMPTE の MXF 関連規格書を読みこなしていく方々を対象に、その前準備として必要とされる MXF 技術の全体像の把握を目的とした「応用編」をベースに、御社のニーズに応じたかたちにカスタマイズして提供させていただきます。

その他、ご要望により XML (eXtensible Markup Language) の基本や FIMS 等の技術セミナーにも柔軟に対応させていただきますので、まずは弊社 (info@metafrontier.jp) までお気軽にお問合せ下さい。

今回のご紹介は以上です。

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

本メールは、弊社スタッフがこれまでに名刺交換させていただいた方や、弊社 HP からのお問い合わせの際、アドレスをご登録いただいた方などにお送りしております。

配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作をして下さい (宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入していただければ自動的に削除されますので、どうぞご遠慮なく。

また本メールを転送などで受取られた方で、今後の受信を希望される場合は、一行目に「配信希望」とご記入の上、お名前、会社名 (あるいは所属組織名) を添えて下記宛先にご連絡いただければ、次回から送信させていただきます。

また本メールに関するご意見、ご感想などがございましたら、こちらも下記宛先にお送り下さい

(宛先: request4newsmail@metafrontier.jp)。

編集/発行 : メタフロンティア合同会社 柴田賀昭

〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-13-12 アーバンビル 6F

URL: www.metafrontier.jp

Copyright (C) 2012-2014 metaFrontier.jp, LLC. All Rights Reserved
